

## 三角帽子

LE TRICORNE

振付 レオニード・マシーン 音楽 マヌエル・デ・ファリヤ 台本 グレゴリオ・マルティネス・シエーラ 衣装・装置 パブロ・ピカソ 初演 デイアギレフ・ロシア・バレエ団(レオニード・マシーン、タマラ・カルサーヴィナ)、アルハンブラ劇場(ロンドン)、一九一九年七月二十二日

スペインを舞台にした一幕物。台本はグレゴリオ・マルティネス・シエーラ(原作はペドロ・アラルコンの小説)。音楽はマヌエル・デ・ファリヤ。振付はマシーン。衣装・装置はピカソ。一九一九年バレエ・リュスにより、ロンドンのアルハンブラ劇場で初演。粉屋をマシーンが、その妻をカルサーヴィナが踊った。

スペインの小さな村に、仲のよい粉屋(粉引き)の夫婦が住んでいる。二人は若く、陽気で、深く愛しあっている。粉屋が水を汲んでいる間に、伊達男が通りかかり、粉屋の妻に色目をつかう。粉屋の妻も愛想よくそれに応える。それを見た粉屋は伊達男を追っ払うが、妻のことは叱らない。自分の美しい妻にほかの男たちが色目をつかうことは、彼にとつてまんざらではないのだ。

コレギドール(地方の代官)が、権威と地位の象徴である三角帽子をかぶって、手下を連れて登場する。彼は粉屋の妻に一目惚れし、是が非でも手に入れようとする。粉屋が家のなかに入ったあと、妻はファンダンゴを踊る。それを見ていたコレギドールが彼女に襲いかかるが、粉屋が飛び出してきて、夫婦二人して代官を袋叩きにする。代官は復讐を誓って逃げていく。

夕暮れどき、粉屋の前に村人たちが集まってくる。粉屋は酒をぶ

るまい、ファルツカを踊り、一同の喝采を浴びる。そこへ代官が兵士たちを連れて登場し、粉屋を逮捕し、連れ去る。妻はひとり取り残される。戻ってきた代官が彼女を追い回すが、小川に突き落とされる。妻は代官を笑うが、助けあげてやる。再び代官が襲いかかってきたので、妻は銃をもちだし、威嚇しながら逃げてゆく。

ひとり残った代官は濡れた三角帽子と上着を脱ぎ、粉屋の家に入り、粉屋の寝間着を着て寝てしまう。明け方、粉屋が逃げ帰ってくるが、自分の寝間着を着ている代官を見て、妻が浮気をしたのだと勘違いし、代官の美しい妻を自分のものにしてやろうと、その場を去る。兵士たちがやってきて、代官を粉屋だと思つて痛めつける。そこへ、村はずれで出会つた粉屋夫婦が帰ってきて、村人たちに代官の非道を訴える。そこで村人たちは代官を追い払い、勝ち誇つたように踊り、代官の人形を何度も空に放りあげる……。

マシーンの代表作のひとつであり、フラメンコを含め、スペイン文化をクラシック・バレエの世界に導入した作品として重要(スペイン舞踊は、フラメンコ・ダンサーのフェリックス・フェルナンデスが指導した)。マシーンはバレエ・リュスを去つたあと、世界各地でこの作品を再演した。一九六九年にはマシーンの娘ターニャ・マシーンがジョフリー・バレエ団で復活再演している。

スペイン国立バレエ団のレパートリーにもなっているが(振付ホセ・アントニオ、全三幕)、これはバレエではなく、フラメンコである。(鈴木卓)

## <ファリャ>

マヌエル・デ・ファリャは20世紀前半に活躍した（ ）の作曲家である。三角帽子以外の作品としては、（ ）、（ ）、チェンバロ協奏曲などが知られている。民族色豊かな素材を輝かしい色彩豊かな管弦楽法で生かした管弦楽曲は多くの人に親しまれている。

三角帽子はストラヴィンスキーの（ ）やラヴェルの（ ）と同じく、（ ）のバレエ団（ロシアバレエ団《 》）の依頼で書かれたバレエのための作品で1917年に試演が、1919年にロンドンでロシアンバレエ団で上演がされた。初演の指揮は E.アンセルメ、舞台と衣装は（ ）によるものであった。振り付けは粉屋を演じた（ ）がおこなったが、その振り付けにはジプシーの踊り手から得たものも多かったようである。

このDVDでは、ピカソ没後20年を記念して1993年にパリのオペラ座で初演の形で再演されたものの記録である。（コンセールラムルー管弦楽団、コールマン指揮、粉屋 K.ベラルビ、粉屋の女房 F. ルグレ、代官 F. ボルジョア）

※ フィナーレのシーンで民衆によって、大きな布をつかった、「わら人形遊び」がちらっと出てくる。（わら人形はその前にでてくるが）これは同じ素材を使ったゴヤの大きなタペストリー（壁掛け）が有名でよく知られている。ゴヤのタペストリーでは、わら人形は『時の権力者』を暗示しているとも言われている。